

# ベトナムの尺度及び建築設計技術に関する陸域・海域の両ネットワークによる伝播と受容

研究代表者 木谷 建太  
(理工学術院 総合研究所 次席研究員)

## 1. 研究課題

ベトナムは、漢字文化圏に属しながら、中国・韓半島・日本とは異なる造営尺度を持ち、さらにその造営尺の運用方法である建築設計技術について、登り梁ケオを合掌に組む独自の木造架構を構成し、また陵墓には異なる寸法体系を用いる独自性を持つ。以上の3つの課題について、陸域・海域に跨がる複数のネットワークの重なりとして捉え、これを総合的に検討することで、ベトナムが他の地域との交流を通じて、如何にして尺度概念を受容し、あるいは共有していったかを解明することが本研究の目標である。

ベトナムの造営尺度とその運用方法である建築設計技術に関する史料として、ものさしや漢喃文献といった一次資料について、目録等リストによって所在を確認している、植民地統治時代に収集した資料群をもつフランス極東学院およびベトナムの国立公文書館や歴史博物館等の所蔵機関で、史資料調査を行う。「港市国家」論および海域アジア研究等の関連周辺研究資料について、ベトナム、フランス、日本国内の図書資料所蔵機関から入手して、研究目的で述べた総合的視野のもと、読解を進め、ベトナムの尺度について体系的な研究を行う。

## 2. 主な研究成果

### 2.1 「建築書」の区分と成立背景に関する試論

「建築書」「建築技術書」などの呼称は、建築ないし建築の技術に関連した書物、という漠然としたものでしかなく、内容や形式など、性質の異なるものを並列に扱ってしまっている現状がある。そこで、あらためて「建築書」を概観し、以下のように区分する。

- (a) 建築を思想・論理によって体系的に書かれたもの
- (b) 建築の管理・統制・記録を目的に書かれたもの
- (c) 実用に則した技能・知識・情報をまとめたもの

ただし、これらは、最も強くあると考えられる性質をもとに区分しており、例えば (a) に区分しても、(b) (c) の要素がない、というわけではないことを付記しておく。

(a) は、ウィトルーウィウス建築書および、それに触発されて編まれたルネサンス期の建築書、インドの『マーナサーラ・シルパシャーストラ』、中国の「考工記」(『周礼』冬官)、また日本の木割書がこれにあたる。

(b) は、中国の『营造法式』および『工程做法則例』、朝鮮の『朝鮮王室儀軌』、ベトナムの『大南會典事例』がこれにあたる。

(c) は、印刷・公刊を前提に書かれたもの、すなわち、ヨーロッパの、いわゆるアカデミーの講義録やパターンブック、日本の雛形本や規矩術書がこれにあたる。また、『营造法式』の内容が

元代に、風水概念が取り込まれて民間に種々伝わっていたものを明代に統合再編した『工師斷正式魯班木經匠家鏡』も、ここに含まれると考えられる。

以上のように区分すると、その成立について、時代・地域による単純な傾向や遷移がないことが明らかであるため、それぞれの背景に関して、より詳しく見ていくことにする。

まず、(b) について、管理・統制・記録の度合いに差はあるが、中国および隣接国に限られ、ここに日本は含まれない。これに関して、[柄谷 2014] (注 1) の、中心 (中国)・周辺 (コリア・ベトナム)・亜周辺 (日本) という区別によって理解が可能となる。すなわち、中心である中国は官僚制度を基盤にした専制国家であり、被支配者が支配者に服従することによって保護を得るやり方 (交換様式 B) によって、帝国を形成した。周辺であるコリアは、新羅において律令制を導入したのち、高麗から朝鮮王朝へと、ベトナムも北属期を経て、黎朝、阮朝と徐々に官僚制国家を形成していった。なお、(b) における管理・統制・記録の度合いの差を生む原因については、なお考察の余地があるが、現段階では、中心と周辺の法制度における違いということにしておく。それに対して、同時期に律令制を導入した日本では、官僚制国家が成立しなかった。官僚制が成立すると、すべての事物は、皇帝を頂点とするヒエラルキーのもと、上意下達の指揮命令系統をもった、専門分化された組織の一部となる。建築とそれをつくる工匠たちも例外ではなく、管理・統制の対象となる。このため、特定の思想・論理によって主体的に建築について書かれるのではなく、管理・統制を目的とした法令集の一部として建築についての項目がある、という形になるのである。

つぎに、中国において、建築書 (b) のはじまりが、『营造法式』(李誠編、北宋元符 3 年 (1100)) であることについてだが、これは、宋代 (960~1279 年) に、一般的選抜という科挙の理念が実現されたことと関係があると考えられる。つまり、事実上地主階級だとはいえ、科挙を通して、士大夫と呼ばれる知識人階層が形成され、そこから、朱氏に代表される「宋学」が生まれた。これが、漢代に定着した、儒教 (孟子) にもとづいた「易姓革命」という王朝交替の革命を正当化する観念と結びつき、官僚制を支える学問 (儒学) となり、官僚制国家が完成したのである。また、この「易姓革命」により、王朝が変わっても、官僚制国家が維持されるという仕組みが生まれた。周辺のコリア・ベトナムでは、この科挙制度を完備した官僚制を導入したため、官僚制国家の形成段階から、建築書 (b) に類するものを有していた可能性が考えられる。

また、[カーター1977] (注 2) によれば、宋代は、中国における木版印刷の最盛期であり、儒教経典 (古典) の復興 (ルネサンス) がなされたという。さらにいえば、複製印刷術は、同時に上意下達の指揮命令の効率的な伝達にも用いられたはずであり、官僚機構の強化に繋がったと考えられ、ひいては建築書 (b) の成立に寄与したと推測できる。

つぎに、(c) についてはだが、これも印刷術と関連する。[カーター1977] では、ヨーロッパにおける、いわゆるルネサンスは、古典的知識と、アラブ人・モンゴル帝国を仲介して輸入された発明 (紙と印刷術) とが合わさって作られた、としている。印刷物の普及にともなって、庶民文化の高まりを生み、旧来の商・工業における独占権を保有した工房・職人組合の否定により、専門教育の一般化や自由な商取引に応じたカタログの需要により、実用に則した技能・知識・情報をまとめた教則本や図案集が編纂されたと考えられる。

ヨーロッパにおいては、1671 年創立の王立建築アカデミー (Académie royale d'architecture) における、ブロンデル (Nicolas-François Blondel、1618~1686) の『建築講義』(Le Cours d'architecture、1675 年) や、ハプスブルク家の下にあった、フィッシャー・フォン・エルラッハ (Johann Bernhard Fischer von Erlach、1656~1723 年) による、史上初の世界建築史銅版画集『歴史的建築の構想』(Entwurff Einer Historischen Architectur、1721 年) などが、その嚆矢と

して挙げられる。

日本の江戸時代について、[内藤 1961] (注 3) では、木版本として世に公刊された技術書は、明暦元年 (1655) の「新編雛形」および「新編武家雛形」をもって嚆矢としており、両書の公刊された江戸中期以降の建築界の動向として、幕府および各藩の大工頭や大棟棄の如き指導的技術者が官僚化し、一方町方棟梁が新興技術者として登場する背景を挙げている。さらに江戸後期には、往返一対の手紙を集めた形式を有し、教科書的機能を旨とした往来本建築書が編纂されたが、[麓ほか 1992] 134 では、これを寺小屋の普及、庶民教育の発達を背景としている。

中国・明代の『工師斷正式魯班木經匠家鏡』の編纂は、永楽帝による南京から北京への遷都・大造営の時期に符合する。これは『營造法式』の内容が、元代に風水概念が取り込まれて民間の工匠たちに種々伝わっていたものが、北京提督工部御匠司の司正であった午榮によって統合再編されたものであり、すでに実用とされたものを記録したという点において、他の建築書とは性格が少し異なる。

最後に、(a) について、地域・時代が異なるため、それぞれの建築書の成立背景について述べる必要があり、紙面の都合上割愛するが、建築書 (a) の成立の背景には、首長制国家から中央集権的な官僚制国家への移行期に、特定の思想・論理によって建築を統御する思惑が生まれ、それを書として体系的にまとめることが求められたのではないかと結論づける。

注 1 柄谷行人『帝国の構造』青土社、2014

注 2 T・F・カーター；藪内清他訳注『中国の印刷術 1 その発明と西伝』平凡社（東洋文庫 315）、1977

注 3 内藤昌「大工技術書について」『建築史研究』1961、30号、建築史研究会、1～18頁

## 2.2 世界遺産の歴史的都心における課題に資する研究

研究費：2019～2022 年度、日本学術振興会・科学研究費補助金 (基盤研究 (B)、課題番号：19H02327)

「観光化が進む世界遺産の歴史的都心における住環境の変化と課題の考察」(研究代表者：吉良森子、研究分担者として研究に参画)

### 研究活動の課題と展望

本研究では、申請者が継続的に研究を行ってきた、ベトナムの独自性 (造営尺度・寸法体系、登り梁ケオを合掌に組む独自の木造架構) を、周辺諸国における建築設計技術との比較研究により、共通点・相違点の分布傾向を導出するとともに、近年、学際的に進められてきている交易ネットワークによる、人・もの・文化の伝播・受容の研究と合わせることにより、ベトナムが他の地域との交流を通じて、如何にして建築設計技術を受容し、あるいは取捨選択していったかを解明することが本研究の目標である。この成果および研究手法の確立・拡大によって、東南アジアにおける建築設計技術や概念の伝播ネットワークや、その前提となる地域的性格の解明へ向けた足がかりとしたい。